

# 中国人留学生の帰国後の労働・生活・意識 —山東省を中心として—

Career, Life and Awareness of Chinese International Students after Returning from Japan to China:

—A Survey in Shandong Province—

張 歆 (神戸大学大学院)

Zhang Huan (Graduate Student, Kobe University)

キーワード：中国人留学生、帰国、意識

## 研究の背景

日本政府は2008年、「グローバル戦略」の一環として、2020年に日本国内の外国人留学生を30万人に増やす「留学生30万人計画」を打ち出した。これに伴い、日本で学ぶ外国人留学生数は着実に増加している。そしてその中で全体の6割を占めるのが中国人留学生である。

中国の海外留学生派遣は、1970年代末頃に本格化した。その背景には、中国政府が1978年に打ち出した「改革開放政策」がある。改革開放政策の人材育成政策として、最も重視されたのが海外留学生派遣政策であった。

そして近年、中国に帰国する留学生が急速に増えている。特に2008年以降、先進国の金融危機の影響を受け、中国に帰国する留学生が毎年24～57%と急速な増加を示し、2012年には27万人に達した。中国は「人材流出国」から「人材回流国」に転換しつつある。

## 研究の目的と先行研究の検討

本報告の目的は、日本から中国に帰国した留学生の労働・生活・意識の実態、およびそこでの問題の所在を明らかにし、留学の意義と課題、政策のありようを検討することにある。

従来、こうした帰国留学生を対象とした研究は、必ずしも多くない。

数少ない研究として、郭晨・呂庶瑾は、主に異文化適応論の観点から、帰国した留学生が新たな中国の言葉や生活環境、考え方に不適応を起こしているとし、政府の対応措置、および、帰国留学生の再適応が必要と述べている。また徐亜文・来島浩は、帰国留学生を採用する企業に調査を行い、企業は人脈よりも高度な職務遂行能力を求めていると指摘している。そして奈倉京子は、主に日本留学を終えて中国に帰国した大学教員が直面する問題として、中国の学界における人脈の欠如、学問の方法論や評価基準の相違等をめぐる葛藤を指摘している。これらはいずれも、重要な研究である。ただし、帰国留学生が直面する問題は、異文化適応のそれにとどまるとは限らない。また企業が留学生に求めるものと、留学生自身が直面する課題も同じではない。そして大学教員になるのは、帰国留学生の中でも一部である。

そこで本報告では、留学生が中国に帰国した後、留学の成果をいかに生かし、いかなる問題に直面しているのかを、多様な職業階層のそれに即して検証することを課題とした。

## 研究方法

本論文の素材とする調査は、2014年7月～8月に中国の山東省で実施した。対象者は、日本への留学経験を持ち、中国に帰国した1980年以降生まれの比較的若い人々である。30名（男性12名、女性18名）を対象とし、インタビュー的な質的面接調査を行った。

調査対象者は、①企業に就職する会社員、②自分で起業した自営業者、そして③大学に勤める研究者である。

## 研究結果

### 1. 全体的特徴

本調査の対象者は、留学先の日本で様々な問題・悩みを経験したが、それでも自らの日本での留学経験を、「広い視野が得られた」、「日本語能力が向上した」、「異文化理解能力が高まった」、「自立能力が高まった」、「日本人の友人ができた」等の諸点で肯定的に評価していた。

彼らは、主に2011年以降に中国に帰国した。彼らの帰国には、①3.11東日本大震災の影響、および②日本経済の不況と中国経済の活況という背景があった。しかしそれと同時に、彼らにとって一層切実な帰国の動機は、「両親が中国にいること」であった。一人っ子政策下で育った彼らにとって、将来的な両親の扶養・介護の想定は、自らの人生の岐路において大きな意味をもったのである。

そして彼らは中国に帰国後、日本と関係がある仕事に就き、留学経験を活用している。また彼らの約3分の2は、中国に帰国したことも「良かった」と肯定的に評価している。その理由もまた、「両親・家族の近くでくらすること」、「安心して生活できること」等、両親を初めとする家族問題、および 3.11 等の災害リスクを背景としたものであった。

ただし彼らは、帰国後の中国での労働・生活に完全に満足しているわけではない。仕事に追われ、複雑な人間関係に悩んでいた。悩みの相談相手は、家族と学生時代からの中国人の友人に限られていた。また日本での生活経験をふまえ、中国の「環境（大気・水質等）」、「生活の便利さ」の問題に不適應を感じていた。そして何より日本留学という長期滞在により、中国社会での人脈関係を築くチャンスを多かれ少なかれ失い、これが帰国後の生活の不利になっていると感じていた。

## 2. 職業階層ごとの相違

さて、こうした生活や意識の実態は、職業階層（会社員、自営業者、研究者）によって大きく異なっていた。帰国後の労働・生活実態に限っていえば、次のような特徴が見てとれる。

会社員は、中国に帰国後、相対的に厳しい境遇におかれていた。彼らは、日系企業に勤務しており、「収入が低い」ことに悩んでいる。多くが転職の希望をもち、現在の仕事には満足していない。社会保障や医療の不備にも、不適應を感じている。彼らは、中国に戻った後、日本人との連絡・交流は最も少ない。そこで時間の経過とともに「日本人的」な考え方・行動様式が次第に「中国人式に戻っていく」と感じている。

これに対し、自営業者は、日本関係の自営業を営み、収入は中間的である。主な悩みは仕事上の人手不足だが、やはり中国の社会保障や医療にも強い不適應・違和感を感じている。そして彼らは、日本にいる日本人や中国人の友人と、仕事上の必要に応じて連絡・交流が多い。そして日中関係の悪化が、仕事に大きな影響を与えている。

最後に研究者は大学に勤務し、収入は相対的に高い。転職希望もない。ただし彼らは昇進・昇格に不可欠な研究業績を作ることに、強いストレスを感じている。また日本での研究の仕方・研究姿勢等との比較で、不適應を感じることも多い。研究者は、日本の大学に出張したり、日本での学会に出席するなど、訪日経験が比較的多い。日中関係が悪化すると、日本語専攻の進学希望者が減るだけでなく、卒業生の就職も難しくなるなど、影響がある。彼らは今後、再度、博士学位所得のために日本に留学したいと考えている。

総じて帰国留学生は、それぞれ職業階層ごとに異なる形ではあるが、帰国後、様々な困難に直面していた。その中で共通して見られた問題は、中国社会での人脈関係の弱さによって疎外されている側面が少なくないことである。また中国政府は留学人材の帰国を期待し、様々な優遇政策をとっていた。しかしそれらのほとんどは、有効に機能していなかった。多くの帰国留学生は、中国社会の周縁に位置し、容易に中国社会に適應することもできず、国境を越えて母国に戻ってきた特別な階層となっている側面もみられた。

## 参考文献

- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 平成 20 年 7 月 29 日「留学生 30 万人計画」骨子  
奈倉 京子 2009-04-25 「日本からの中国帰国留学生の自己実現と「制約」に関する事例的考察」『中国研究月報』 63 (4), 1-19
- 徐 亜文・来島 浩 2007 「中国における帰国留学生の就職問題—山東省の事例を中心に—」『研究論叢 人文科学・社会科学』 57, 31-46,
- 呂 庶瑾 2009 「返郷文化衝擊研究」 『上海外国語大学』
- 黄 遠卿 2013 「帰国留学人員文化再適應問題研究」 『泉州師範学院学報』 03 期
- 郭 晨 2012 「中国帰国留学生逆向文化衝擊影響因素分析」 『上海外国語大学』
- 浅野 慎一 2007 『日本で学ぶアジア系外国人』 大学教育出版社
- 佐藤 進 2004-03-31 「社会発展に役立つ留学生教育—帰国留学生を現地に訪ね—」『松本大学研究紀要』 2, 21-32,
- 王 輝耀・苗 緑 2013 『中国海帰発展報告 (2013)』 社会科学文献出版社
- 2007 年 1 月 10 日 「中国政府海外留学人材の帰国を促進」『月刊 アジアの友』 第 452 号